国木田独歩『非凡なる凡人』の系譜

北野昭彦

I

独歩の作品の中で、『非凡なる凡人』と『日の出』は、上昇期の市民社会に特有の明かるい肯定性を反映した、一系列の作品と見なされてきた。また、事実そうであろう。

大体、この頃書かれた独歩中期の作品群には、『少年の悲哀』のごとく悲哀感にみちた抒情を漂わせた作品とか、『運命論者』『酒中日記』『女難』等のごとく、暗い運命の前に打ちひしがれていく弱小なる人間を扱った作品が多い。その中にあって、これと同時期に書かれた『非凡なる凡人』と『日の出』は、「運命を開拓しつゝ進んで行く」（非凡なる凡人）青少年がヒーローとなっている。これは『運命論者』や『酒中日記』のアンチ・テーゼである。それも、数少ないアンチ・テーゼである。そういう意味では、この二作が「一見不思議と思はるゝ二篇の作」[1]とか、「独歩としては、むしろ意外なような一系列の作品」[2]という印象を一般に与えてきたのも、無理からぬように思われる。なぜなら、これは「立志伝中の人物といっては低俗すぎるが、風変りな立志伝と考えてさしつかえのない物語り」[3]と受けとれるし、また、「明治的立身出世主義を否定しつつも、健康で明るく、自由独立を願望する資本主義初期の精神のみが、強く打ち出されてゐる」[4]（傍点は引用者）ものとして、独歩には稀有の作品だからである。

ところで、この二作に対するこれまでの評価は、必ずしも高いとはいえない。たとえば、「底の浅い健康さを土台とするもの」[5]とか、「独歩の理想が社会的反省なく織り込まれて、現在私達がぼんやり読むときに講談社的理想主義の匂ひさへ感ぜざるを得ない程である。」[6]といった評が、それを物語っている。だが、これは決してゆえなきことではないばかりか、殊に後者などは当を得た批評というべきであろう。たとえば、

「僕は知れば知るほど此男に感心せざるを得ないのである。感心すると言った処で、秀吉とか、ナポレオンとか其他の天才に感心するのとは異うので、此種の人物は千百歳に一人も出るか出ないかであるが、桂正作の如きは平凡なる社会が常に産出し

得る人物である、又た平凡なる社会が常に要求する人物である。であるから桂のやうな人物が一人殖へればそれだけ社会が幸福なのである。」（非凡なる凡人）

といつた素朴な肯定的態度や、また、『日の出』における二宮尊徳的勤労主義と、私有財産の蓄積と、社会事業という三者の単純な結びつき方を考えれば、たしかに土方氏の言われるごとく、「社会的反省」を欠いた「講談社的理想主義」のそしりはまぬがれ得ないであろう。

それにもかかわらず私は、中島健蔵氏同様、「独歩のこれらの作品は、特別の考察に価するもの」[7]と考えざるを得ないのである。ただし、中島氏の重視のしかたと私の重視のしかたとでは、ややニュアンスが違つているかもしれない。

私が「特別の考察に価する」と考える理由は二つある。

その第一は、この二作が独歩によつて書かれるべき必然性がどこにあつたか、ということと、その必然が背負つている問題性である。換言すれば、この「運命を開拓しつゝ進んで行く」新時代のパイオニアをヒーローとする二篇が、何ゆえに、このような「社会的反省」を欠いた「講談社的理想主義」の形でしか現われて来なかつたのか、という問題である。これには当然、その克服には何が必要であつたかという問題も、その中に含まれてくるであろう。

第二は、この新パイオニア物語二篇と、『運命論者』をはじめとする運命悲劇とが、独歩の創作主体内部の深層においてどう結びついていたか、という問題である。つまり、平野謙氏の言葉を借りれば、独歩中期の作品には、「『酒中日記』『運命論者』『悪魔』『正直者』『女難』のような、暗い宿命的な作品群」と、「『日の出』『非凡なる凡人』『馬上の友』のような上昇期の市民社会に特有な明るい肯定的な作品」とがある。そこで当然、「そういう明るい肯定的な作品系列と、先の哀感や運命観に根ざした作品群とが、独歩個人のなかでどう結びあわされていたかは、やはり問題」[8]になつてくるわけである。

独歩はかつて『潔の半生』の中で、次のように記していたことがある。

「さすがに日記なり、支離滅裂のうち、自ら関係あり、聯絡あり、照応あり、日より日、月より月に一個の潔の生ける生命は一貫して現はる。誌されし此事彼事、何の関係なきに似て、潔の眼と心とを通じて自ら聯絡のありて存す。」（傍点は引用者）

これはおそらく、この作中の主人公である「潔」に託して、独歩が自らの日記（おそらく『欺かざるの記』であろう）に対する省察のことばを書き記したものと思われる。ところで、この文中における「日記」に「誌されし此事」と「彼事」との「関係」を、そのまま独歩の作品相互間の有機的な「関係」にあてはめることはできないか。たとえば、平野氏の言う「明るい肯定的な作品系列」と、「暗い哀感や運命観に根ざした作品群」とが、「独歩個人のなかでどう結びあわされていたか」の問題に置きかえてみた場合、この文章は、その問題を解く一つのヒントになるのではあ

るまいか。すなわち、「暗い哀感や運命観に根ざした作品群」と、「明るい肯定的な作品系列」とは「何の関係なきに似て」その実、作者の「眼と心を通じて自ら聯絡」があり、その間に作者独歩の「生ける生命は一貫して」通い合っている、と観ることができるのではあるまいか。

以上のよう観点から、今度は我々の「眼と心を通じて」、「暗い宿命的な作品群」と「明るい肯定的な作品系列」との「聯絡」を求め、そこに「生ける生命」の「一貫して現は」れているところをたどって行けば、平野氏の提示した問題に対する何らかの解答が、おのずと得られるものと思う。実は、私が先に提出した第一の問題と第二の問題とは、本来は一つのものでなければならないと考えるのである。

Ⅱ

立身出世主義の虚妄を感じて「天地生存」を求め、所謂「虚栄城中」から脱出して「山林に自由存す」と歌いあげ、「山林海浜の小民」のなかに「質朴なる生活、天真の人情」を求めていつた詩人独歩の世界――それと『非凡なる凡人』の世界とは、一見はなはだしく矛盾するかに見える。

『非凡なる凡人』の主人公・桂正作は、明治的立身出世主義の教書として当時のベスト・セラーになつた『西国立志編』一冊によつて、彼自身の人生を決定する。「桂正作は活た西国立志編」であり、「西国立志編は彼の聖書」である。しかも、当時『西国立志編』の愛読者の多くが官員や政治家志望で、『西国立志編』の根底にある科学的実証精神や経済的合理主義への理解に乏しく、もつぱら「忍耐」「艱難、辛苦」「倹約」[9]「剛毅」といつたモラルの中に立身出世の教義を読みとつていたのにくらべると、桂正作は最も忠実な『西国立志編』の愛読者であり、またその実践者であつた。

「工業で身を立つる決心だ。」と言つてのける彼にとつては、「ワットやステブンソンやエヂソンは彼の理想の英雄」であり、「発明に越す大事業はない」のである。そうした科学的精神のみでなく、彼は経済的合理主義をもこの書から学びとつたのである。

小学校卒業と同時に銀行へ就職、その間に東京までの旅費と三ケ月分の生活費を貯蓄して上京し、当座は新聞売と砂書きで生活を立て、日清の間が切迫するや号外で儲け、工手学校夜学部に入学する。工手学校を卒業するや、横浜の会社の電気部技手となる。これが桂正作の立志伝である。

それは、彼の父が「殖産」の流行語にかぶれ、「士族の商法」で失敗して破産したのとは対照的である。むろん正作も「一転すれば冒険心となり、再転すれば山気となる」気性を父から受けついでいる。しかし、正作が「西国立志編のお陰で、此気象に訓練を加へ、堅実なる有為の精神とした」のは、彼が『西国立志編』からその科学主義のみでなく、市民的モラルや経済的合理主義をも学んだからであろう。

このように彼は自ら身を立てたのみでなく、故郷を飛び出して来た「突飛者」の弟にも『西国立志編』を読ませ、自らの給料で弟を養いつつ工手学校へ入れ、「突飛者」を真面目な技手に仕立てている。

「彼（桂正作）は随分少年に有勝な空想を描くけれども、計画を立てゝこれを実行する上に就いては少年の時から今日に至るまで、少しも変らず、一定の順序を立てゝ一歩々々着々実行して遂に目的通りに成就するのである。」（傍点は引用者）

「彼ほど虚栄心の少い男は珍しい。其の境遇に処し、其の信ずる処を行うて、それで満足し安心し、そして勉励して居る。彼は決して自分と他人とを比較しない。自分は自分だけのことを為して、運命に安んじて、そして運命を開拓しつゝ進んで行く。」（傍点は引用者）

ここに桂正作の、所謂「明治的立身出世主義者」の典型とは違つたタイプとしての人間像が、浮かんでくるであろう。ある意味では正作のような存在は、「産業立国」「殖産興業」「富国強兵」のスローガンを掲げた明治政府の側からすれば、政府の嘱望する忠実な働き手であり、「期待される人間像」であつただろう。しかし、彼は立志伝中の人物にはちがいないが、巨万の富や利潤を追う実業家でもなければ、官途に高位や虚名を追う立身主世主義者とも、はつきり別物なのである。

何ゆえ、独歩はこういう人物を彼の作品に登場させたのか。『非凡なる凡人』は明治36年3月発行の『中学世界』に発表された。当然、独歩は発表誌の読者を意識して執筆したことも考えられる。しかし、この作品は独歩の信条や人間的興味とは無関係な、当時の中学生へのサービス精神のみの所産であうか。そうでないことは、岡落葉[10]の次の直話録を見ればわかる。桂正作にはモデルがあつた。独歩はこれに格別な人間的興味を覚えたらしい。岡落葉の語るところによれば、こうである。

「作では、主人公は桂正作となつてゐますが、実際は桂糺といひます。私とは遠い親戚になるのですが、家が近くて、小学校にも一緒に上つたので、私には幼友達でありました。その桂のことを、何かの折に話しましたら、独歩は非常に面白がつて、もつと精しくしてくれろといふのです。改めて知つてゐるだけを話しましたら、それをそのままに纒めたのがこの作品となつたので、これなどは事実そのままで、小説といつてよいかどうか疑問な位です。（中略）独歩に桂の話をした時には、桂はもう工手学校を出て、横浜の船渠会社に勤めてゐました。とにかく立志伝中の珍らしい人なので独歩はすつかり感心してしまひ、会ひたいからどうか連れて行つてくれ、などといつたのでしたが、その機会はなくてしまひました。」[11]

何ゆえに独歩は、この「桂正作」的人間像にこれほどまで興味をひきつけられ、またこのように共鳴してしまつたのか。その淵源をたぐれば、おそらく独歩が上京してきた当時までさかのぼり、その時点から始まる独歩の精神史的歩みが、そのゆえんを物語つてくれるのではないか、と私は考える。

Ⅲ

独歩が徳富蘇峰の『将来之日本』や『新日本之青年』に心酔するより以前、彼自らが『西国立志編』の愛読者であったかどうかは詳らかではない。ただ、彼自らが告白しているように「功名心が猛烈な少年」[12]だったとすれば、政治家を志して上京してから「精神上に一大革命」[13]を体験するまでの間は、『西国立志編』の励起した立身出世主義的風潮の埒外に居たのでないことだけは、確かであろう。

『西国立志編』は福沢の『学問のすすめ』とともに、旧来の価値体系が失墜した維新変革後に、新時代の生き方と栄達の目標を方向づける書物として、あらゆる年代層に歓迎された。しかもその内容が政府の文教政策ともタイアップしていたため、文部省の小学教科書にも載せられている。一時、自由民権運動の高まりに政府が対抗して教育政策を右旋回させたため、教科書リストから姿を消したこともあるが、『学問のすすめ』がその後ずっと教科書リストから消されたのに対し、『西国立志編』は、明治14年の「文部省年報」で再び「小学ロ授ノ用書ニ限リ」という制限つきで許可されている。かくしてこの書はその後、大正年間に至るまでベストセラーの地位を保つたといわれるくらいなのである。[14]

この『西国立誌編』の励起した立身出世的人間像を文学的に形象化した作品の系譜を、前田愛氏は以下のように位置づけている。

「立身出世をめざす青年達を取り上げた小説は明治十七年の『世路日記』から、明治二十三年の『帰省』にいたつて一つのサイクルを終えたのである。このサイクルの中程には『当世書生気質』『浮雲』『舞姫』がそれぞれ位置するはずである。」つまり「『学問のすすめ』や『西国立志編』が励起した立身出世的人間像を、文学的形象として最初に定着した」のが菊亭香水の『世路日記』であり、主人公の小学教師は地方教育界の腐敗を憤り、将来に理想を抱き、教え子の女生徒と将来の夫婦約束をして郷里を出立し、立身出世をめざしてこれに成功する。「彼自身の生き方がまさしく『西国立志編』の実践」なのである。しかし、すでにこの作品に「故郷回帰」の心情がくり返し述懐されている点に前田愛氏は着目する。

「故郷の自然は都会の苛烈な生存競争が強いる絶え間ない内的緊張に休息と慰藉をもたらす。(中略)このような故郷の役割が拡大され、立身出世主義の虚妄を自覚する契機に転化しているのが宮崎湖処子の『帰省』である。(中略)『世路日記』によつて立身出世の情熱をかき立てられ、笈を負うて都会に集つた青年達が出会うはずの世界が、『書生気質』であり、『浮雲』であり、『舞姫』なのである。(中略)内海文三と太田豊太郎が、外側からは官僚機構ないしは俗物的世間によって、内側からはかれらの内閉的な個性そのもののために、手痛い敗北を喫し、惨めな妥協を強いられたことはいうまでもない。しかも内海文三や太田豊太郎の背後には、自由民権運動の退潮に捲き込まれ、生活の目標を見失つた青年達の悲劇が累積していた。『世路日

記』が提示した立身出世の設計図は、明治二十年前後の現実に曝されて、急激に色褪せて行くのである。[15]」

『世路日記』――『当世書生気質』『浮雲』『舞姫』――『帰省』――これで本当に「一つのサイクルを終えた」のであろうか。たしかに明治20年前後の文学史的な一連の流れとしての「サイクル」は終つた。しかし『帰省』から約10年前後を経て、この「一つのサイクル」の縮図が、今度は国木田独歩という一人の作家の文学の中に甦生され、重なり合うのである。今、仮に前田氏の設定した「サイクル」に基づいて、独歩の「サイクル」を設定してみよう。

まず、「『西国立志編』の実践」ともいうべき『世路日記』の位置に重なるものとして、『馬上の友』と『非凡なる凡人』をあげることができよう。しかし、『非凡なる凡人』はこの系譜から外しておきたい。なぜなら、同じ「『西国立志編』の実践」でありながら『世路日記』の系譜から外れている点こそ、私が重視したい点だからである。

次に『当世書世気質』や『舞姫』の位置と重なり合うのが、『あの時分』である。「自由民権運動の退潮に捲き込まれ、生活の目標を見失つた青年達の悲劇」がここにも見られる。

最後に『帰省』の位置にくるのが『帰去来』である。ここでも「故郷の役割が拡大され、立身出世主義の虚妄を自覚する契機に転化」している。

ここでことわつておかねばならぬことがある。明治20年前後の文学史の中の「サイクル」においては、『世路日記』の世界は『浮雲』や『舞姫』の出現によつて否定されてしまうが、独歩のサイクルの中では、『馬上の友』は一概に『あの時分』や『帰去来』によって否定される世界だとはいえない、ということであり、『非凡なる凡人』や『日の出』はなおさらそうだ、ということである。これは前掲のあの平野謙氏の提示せる問題を考える上の、留意点とすべきであろう。

『馬上の友』『あの時分』『帰去来』――これで『世路日記』から『帰省』までの系譜と重なり合う独歩のサイクルは終る。

だが、興味深いのは、『帰去来』の終点から始まるその後の続篇である。それが『空知川の岸辺』『武蔵野』『牛肉と馬鈴薯』『運命論者』『悪魔』と続く精神遍歴である。

だが、ここでもことわつておかねばならぬことがある。『馬上の友』は、『空知川の岸辺』以下『運命論者』や『悪魔』によつて一概に否定されてしまうものではなく、『非凡なる凡人』や『日の出』ともなれば、なおさらそうだ、ということである。これも平野氏の提出した問題を解明する上の留意点とすべきであろう。

『非凡なる凡人』の桂正作にせよ、『日の出』の池上権蔵や大島先生にしても、彼らはいずれも功名の舞台や「虚栄城中」や権力的地位とかかわらない所で、自らの「事業」に従事する「小民」である。それは、「現今の政党も此のまゝにては遂に吾が敵たるを知」(欺かざるの記26・2・19)り、時の権力につながるものをすべて「虚栄」(同)として退けねばならなかつた独歩の内部と、決

して矛盾するものではなかつた。「運命を開拓しつゝ進んで行く」「自主独立」の生活と、功名心や虚栄心や権力欲につながる立身出世主義の拒否――この二点が結び合わさつた地点に、『非凡なる凡人』と『日の出』は成り立つているのである。それは独歩が発見した、民衆の中の一つの現実であつた。

しかも、「国民の反映」であるべきはずの政界が「政治的、即ち野心的、名利的、肉慾的」の場に堕落した現実を批判者の視点から再現していく階梯を一気に飛び越えて、「政治的」の全面的否定に傾いた地点から、もつぱら「山林海浜の小民」に共感を求めていつた独歩の歩みを考えれば、『非凡なる凡人』や『日の出』の中に、ことさらに政治問題や社会問題との抵触点が省かれているのも、ゆえなきことではない。この二作には、ブルジョア・デモクラットとしての生への意欲から「政治的、即ち野心的、名利的、肉慾的」が放棄された地点において、「自信、倹約、労働、真面目の道徳」(17)(欺かざるの記26・2・19)という実践倫理や、「愛と誠と労働の真理」(18)(同26・3・21)が形象化されているのである。

Ⅳ

ここでもう一度「立身出世主義の虚妄を自覚」する『帰去来』前後の独歩の精神史的時点へ戻ろう。

『あの時分』『帰去来』そして再上京――この遍歴の次にくるものは、さまざまな「あこがれ迷」いであつた。

「吾何を為すべきか。是れ昨日来の吾が苦心する処なり。政治か、宗教か、教育か、文学か、哲学か。」(欺かざるの記27・7・18)

「余は小説を書くべきか、詩を作るべきか、馬にのりて人を殺す可きか、講壇に立ちて空呼すべきか。只だ尤も自然に生活せんと思ふ也。余は有体に言へば恒産ありて山林に一良民として過し得れば足るが如し。余に恒産なし。故に生活の方法にあこがれ迷ふ。」(中桐確太郎宛書簡27・9・10)

独歩は政治や哲学や宗教にも心ひかれながら、次第に「山林独立の生活」と「文学」の方へ向かつていく。『帰去来』において故郷に「真の生活」を築けなかつた彼は、「志を立て理想を追ふて、今や森林の中に自由の天地を求」めて北海道に渡る。そして行きずりの旅館の主人を見て、フロンティア的「小民」像を胸に描く。(19)

「彼はよく自由によく独立に、社会に住んで社会に圧せられず、無窮の天地に介立して安んずる処あり、海をも山をも原野をも将た市街をも、我物顔に横行濶歩して少しも屈托せず、天涯地角到る所に花の香しきを嗅ぎ人情の温かきに住む、げに男はすべからく此の如くして男といふべきではあるまいか。」(空知川の岸辺)

この中に彼は「自由独立」「天地生存」「天真の人情」という、彼の志向のすべてを満足させる理想的人間像の原型をみるわけである。ただし、ここではすでに「政治的、即ち野心的、名利的、肉慾的」の渦巻く舞台の外に、この理想像が描かれていることに留意すべきであろう。換言すれば、彼の理想のすべてを満足させ

る理想的人間像は、もはやこのような場でしか求めるほかはなかつたのだといえよう。

しかし、北海道の『空知川の岸辺』にも「自由の天地」はなかつた。そしてまた上京。自由と事業と理想を同時に求めて得られなかつた彼は、もはや自由の放浪ばかり追つてはいられない。一方では「山林の自由」に憧れながらも、また一方では何らかの生活を立てねばならぬ。そのためには「虚栄」の巷なる都会に生活の方途を求めねばならない。なぜなら「山林に自由存し都会に事業あり」だからである。

「僕都会に在りては田舎を恋ひ田舎に帰りては都会を思ふ。僕が性に両極あればなり。夕に大静寂、自然的自由を恋ひこがれ朝に大活動、歴史的事業を欲すれば也。山林に自由存し都会に事業あり。」（大久保湖邦宛書簡27・9・27）

生活の必然を都会に求めたからといつて、都会生活が好ましいわけではない。虚栄の巷は依然として虚栄の巷であつて、彼の心は「自然的自由に恋ひこがれ」る。かくして彼は生活の方途を都会に求めながらも、「都に程近き田舎」（星）に茅屋を構え、「一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈して居る場所」に「詩興」を感じる。それが『武蔵野』である。そして、これあるがゆえ、彼はこれを精神的立脚点として一応東京生活に定着し、彼の浪漫的放浪生活はここで終るのである。都会での「事業」と田舎の「自然的自由」を交互に思いながら、浪漫詩人もついに生活の必然を都会に求め、東京生活に定着した。

「自由独立」、社会的伝習的隷属からの解放、「天地生存」の理想、「名利追争」の外に有つてしかも働きのある人生――こうした理想的人間の原像を、先の『空知川の岸辺』に出てくる歌志内の旅籠屋の主人に見たのだが、この歌志内の男が仮に生活の場を都会に求めたとして、そこに生きんがための必然の姿をとつたのが『非凡なる凡人』の桂正作的人間となるのではあるまいか。

吉江喬松は『日の出』と『非凡なる凡人』について、次のように記している。

「一人（『日の出』の大島校長）は自然の無限の生育力を体現して、幾多の少年にその力を鼓吹し、他（桂正作）は社会生存の中に於て、小さきながらに強固な生くる途を開いて行く人間である。そして此等の非凡なる凡人が作者独歩の意識の一隅に存続してゐて、現実観を構成してゐて、無窮な時の流れ、広大な自然の開展との対照の標準にならずにはゐられなかつた。そしてこれこそは、封建組織の破壊の後に、その崩落の廃址の上に芽を伸ばしだした春草の萠え出る力であり、当年の青年の抱いたプティト・ブルジョワジィの生きんがための必然の姿であつたのである。しかもこれだけが詩人独歩の意識の全部を占領するものではなく、それ等の必然に生きる姿をも包括して、寧ろそれを対照の基準として、空ゆく雲の自在を求め、無窮を追究し、封建城廓からの解放、同時に自己の解放をも享楽せずにはゐられなかつた。」（傍点は引用者）

独歩はよく詩人の敵として、また「新時代の要求」に敵対する

ものとして、「社会習慣」をあげている。ところで、この「新時代の要求」の敵としての「社会習慣」には二相がある。一つは旧時代の残滓としての封建的因習である。もう一つは、旧時代はもちろん、新時代がまた生み出しつつある「名利の追争」であり、その「名利の追争」が生み出す「狂態」の悲惨や「社会の不平等」であり、またそれが当然であるかのごとく正当化する社会の虚偽・虚飾・偽善などの一切である。これが所謂「近代の妄想」（欺かざるの記27・6・8）である。前近代からの封建的因習と「近代の妄想」――この二つが独歩の提出する「新時代の要求」の「敵」なのである。

この二つの「敵」のうちの前者、すなわち封建的因習の対極となる第一の新時代の規範が「不羈、独立、自由」の生活であり、『馬上の友』や『非凡なる凡人』の主人公はこれを実践し、そして成功した青年達である。彼らがともに封建時代の生き残りともいうべき父親との対決の形をとつたり、再出発に失敗した父親の限界点を踏み越えて、父親と違つた方向へ自力で「独立」をかちとつて行く姿として描かれ、作者がこれに多大の共感をよせているのは、決してゆえなきことではないのである。『河霧』『二少女』『酒中日記』等が一つの歴史的現実ならば、これもまた一つの歴史的現実だつたのである。

二つの「敵」のうちの後者、すなわち「近代の妄想」の対極にくる第二の規範は何か。それは「我国政をして自由なる政治たらしめ我国民をして真理理想に由て立つの国民たらしめ、我国運を

して世界人類進歩の魁（さきがけ）たらしめんとする」（欺かざるの記26・2・19）「大革命」が達成された後の「新世界」であり、「人類社会」の未来像（トピア）である。すこぶる観念的抽象的な表現だが、これに加えることのできる確実な注釈が少くともここに一つある。「『名利』よりも他に『人間存在』を価する者を見出し」（社会と人）て、「『名利』を虚となすの理想」（同）に立たねばならぬ、ということである。だが、たとえ抽象的にせよ、このような目標をもち続けてこそ、「未来に来る時代を教（ゆ）ること」（欺かざるの記26・8・2）ができ、「新世界の予言者たるべき任を有す」（同27・9・16）ることができるのだ、と考えていた。

けれども、独歩の切望する「大革命」が起りうる条件はどこにもなかつた。そこで、この「名利追争」の「狂態」の対極にくるべき規範を、現に存在する個々の人生の中に求めたのが「山林海浜の小民」への共感である。先の『空知川の岸辺』における歌志内の旅店の主人をその原像として、『源叔父』以下、『日の出』の大島校校長や池上権蔵など、独歩の文学に登場してくる無名の民衆がそれである。やがて彼の描く「小民」は、「山林海浜の小民」のみならず、都会に生活の必然を求めて生きる「小民」の上にも及ぶ。彼らはいずれも、権勢や功名の舞台における「名利の追争」などとはおよそ縁遠いところで、各人各様の人生を精一杯生きている。それは一口にいえば、「『社会利害』の外に有りて而して働にあ」（社会と人）る「人生の真意」の具現者であり、「愛と誠と労働の真理」の具現者なのであつた。むろん桂正作もこの

中にはいる。前にものべたように、『非凡なる凡人』も『日の出』も、「自主独立」の生活と、立身出世主義の否定の上に成り立つているのであつて、その意味では、この二作の主人公は第一の規範と第二の範囲とを共に満足させる存在だつたのである。

V

独歩は桂正作のような『西国立志編』の実践者だつたとは必ずしもいえない。彼は文学者として自らの「運命を創造」したが、そこに至るまでは、政界を振出しに北海道開拓事業の夢にいたるまで、理想を何らかの現実的存在として地上社会に具現しようとした試みは、みのらなかつた。こうした数々の挫折の体験は、彼の内に暗い宿命的な運命観を巣食わせ、『運命論者』『酒中日記』『女難』『悪魔』などの作品を生んだ。しかし、こうした暗い宿命的な運命観のみが、独歩の運命観のすべてだつたわけではない。

「吾人の日常遭遇する總ての出来事を以て、直に単純なる事実とのみに解釈し了る事能はず。事実以上、吾人の力を以て予測し難き運命の存する事を認む。（中略）吾人の智力の未だ到底予測し得ざる何等か神秘不可思議なる力の存するありて、吾人の一生の半はその手に操らるるに非ざる乎。余は此力を以て運命と解すなり。故に余は吾人日常の總てを通じて単に事実とのみ解し、運命の力も否定し去る能はず。然れども又總てを運命の力なりと断定して、運命の力以外全然人間の権威を認めずと言ふに非ず、所詮、吾人一生の起伏を通じて、事実と運命とは相半ばするなり。されば余は半面運命論者にして、半面事実論者たるなり。人間の権威能く運命を作る事を否定せざると同時に、或点以上人力を以て運命に抗すべからず、運命の力に、人間は服従せざるべからざる事を肯定す。」（病牀録）

人生にはさまざまなものがからみ合つていて、簡単に割り切つてみることはできない。明るい面もあれば暗い面もあり、自由な面もあれば、どうしようもない面だつてある。この両極を代表するのが『非凡なる凡人』の系列と『運命論者』である。すなわち、『運命論者』が「人の力を以て抗する事能はざる運命の力」に「服従せざるべからざる」一方の極を示すものだとすれば、「人間の権威能く運命を作る」もう一方の極の範型として、『非凡なる凡人』『日の出』『馬上の友』が書かれた。とすれば、この正反対の極にある両系列の作品が、ともに短篇集『運命』の一冊の中に収められていることも意味あることだと思われる。

独歩はこの「運命を作る」局面と、運命に「服従せざるべからざる」局面とに共に眼を向け、この両極の間における自由と必然、創造と服従、理想と現実などの矛盾律を認めながらも、これを包括的、全体的な相のもとに大観することによつて、そこに「一生の起伏を通じて、事実と運命とは相半ばする」ところの、人生の実相を見出そうとした。こうして彼は『第三者』『夫婦』『恋を恋する人』『少年の悲哀』に愛の不調や別離のもたらす運命を観、『女難』『正直者』では、人間を運命的に支配する肉慾という自然力の実体を観る。また、『富岡先生』『酒中日記』『悪魔』『竹

の木戸』などでは、性格と客観的現実の状況とが運命的にからみ合う悲劇を描く。

つまり、『運命論者』と『非凡なる凡人』とは、「一生の起伏を通じて、事実と運命とは相半ばする」人生の全体的な相の中の、両極に位置づけられる作品なのである。特に『運命論者』は、この両極の中程に位する「事実と運命の相半ばする」からみ合いを、意図的に捨象して図式化したところがある。そして、これもまた、独歩にとつては人生のある一側面として切り取つて示すべき真実だつたようである。

Ⅵ

「余は空想家にして、又空想の実行家なり。日夜空想を夢みて、其空想を実行せんと欲せり。而もそを実行すべく余は餘りに現実に対して執着の心薄し。之れ余が奈何なる事業にも成功せざりし根本原因なり。」（病牀録）

晩年に自らをこのように回顧した独歩が、

「彼は随分少年に有勝な空想を描くけれども、計画を立てゝこれを実行する上に就いては（中略）一定の順序を立てゝ一歩々々着々実行して遂に目的通りに成就するのである。」（傍点は引用者）

という桂正作の人間像に心ひかれたことは、充分にうなずけるであろう。特に正作のように、人知れぬ所で、いかなる対面上の虚偽虚飾に動かされることなく、たくまず、どこまでも自己に対して忠実に純粋に生きながら、しかも社会に有用な働きをなすこと——それはかつて独歩の求めた、または求めつつあつた生き方と、一脈通ずるものがあろう。独歩は桂正作の中に、そのような「人間」を見出そうとしたのではあるまいか。

ところで、「事業にも成功せざりし」独歩と、「着々実行して遂に目的通りに成就する」正作、この両者の差は、単に個性的な相違にのみ帰せられるであろうか。

何よりもまず、両者の描く理想や事業の目標がまるで違う。独歩の描く「理想の事業」は、「我国政をして自由なる政治たらしめ我国民をして真理理想に由て立つの国民たらしめ」「世界人類進歩」の一翼をになうことであり、「山林独立の生活」に「自由」と「仕事」と「文学」を併立させることであり、未開の大地を切り拓いて「自由の郷」を創造することであり、「虚栄の巷」に渦巻く名利野心・栄辱得喪の「狂態」から一線を画して、「我が心霊の独立」と「自由」を保証する「真の生活」を打ち建てることであつた。それは何らかの形で「人間革命」につながるものであり、同志を必要とする場合もあれば、現実の俗物的世間との戦いや、また現実からの手痛い復讐にあうことも不可避とした。あるいはまた究極においては社会の中に相渉つて自己の理想を具現していくのが目的でありながら、その理想の拠り所とすべき自己の純粋性を保持するため、現実の汚醜から自己を隔絶するという矛盾をも体験しなければならなかつた。

だが、正作の「事業」はもつと即物的なものであり、しかも明

治政府の殖産興業、富岡強兵政策とみごとに一致していたのである。彼は決して「不羈、独立、自由！　人は此地上に於て其十分を享有すべき約束を持て居ない」（帰去来）などとは叫ばないであろう。『世路日記』によつて立身出世熱をかきたてられた青年たちが出会うはずの世界が、『書生気質』や『浮雲』や『舞姫』であつたとしても、それは正作には無縁であろう。彼は外側からの官僚機構や俗物的世間を相手に戦つたり、敗北の痛手をなめたりすることはないであろう。こうした差異の間に介在するさまざまな問題点について、『非凡なる凡人』ではまつたく触れられておらず、正作の正き方がただ単純に「社会の幸福」と結びつけて肯定されているのは、この作品の大きな弱点であろう。こうした問題追究の可能性は、作者が作者自身の半生の歩みと、正作の歩みを距離測定する、その中にこそ潜んでいたはずなのであるが――。同様のことは『日の出』にもいえる。桂正作の「『西国立志編』の実践」を、二宮尊得流の勤労主義に置きかえてみれば『日の出』とかなり似通つた構造になるであろう。

独歩が桂正作の人間像にひかれたのは、その理想に対してではなく、その実践形態の面においてであることは明らかである。独歩は己れの理想と正作の理想の距離から派生するさまざまの問題を捨象して、己れに真似のできなかつたその実践形態の面で、かんたんに共鳴してしまつているのである。それにまた、「天地生存」の理想が現実的存在として社会の中に成立しえない苦しみを体験した独歩にとつては、理想を地上の現実に具現していく人間像を描く場合、このように「理想」なるものが社会問題に抵触しない範囲内の理想である場合に限定されざるをえなかつた、という点も指摘しておかねばなるまい。

（42・9・17）

〔諸註〕

(1) 吉江喬松「国木田独歩研究」（昭7・新潮社版日本文学講座第13巻・明治時代下篇）

(2) 中島健蔵「国木田独歩論」（昭31・筑摩書房版現代日本文学全集57「国木田独歩集」所収）

(3) (2)に同じ。

(4) 吉田精一「自然主義の研究」下巻（昭和33・東京堂）第五部第二章。

(5) 片岡良一「自然主義時代の独歩」（「文学」1952・3）

(6) 土方定一「近代日本文学評論史」第Ⅲ章（昭12・西東書林）

(7) (2)に同じ。

(8) 平野謙「国木田独歩集」（昭37・講談社版日本文学全集18）の作品解説。

(9) 前田愛「明治立身出世主義の系譜――『西国立志編』から『帰省』まで――」（「文学」1965・4）

(10) 岡落葉は独歩と親交のあつた画家で、『小春』の小山のモデルだといわれている。

(11) 森銑三「独歩の小説とそのモデル」（「国文学――解釈と鑑賞」昭25・7）これは直話録で、はじめに次のようなことわり書きがしてある。「晩春の一日、岡落葉画伯を訪うて、国木田独歩の小説に就いての話を聴いた。以下はそれを纏めたのである――」と。

(12)(13) 「我は如何にして小説家となりしか」

(14)(15) 以上は前掲の(9)の論文による。

(16) この点については拙稿「国木田独歩の『理想の事業』と『小民史』

の文学的創造」（「論究日本文学」第26号・昭41・1）を参照されたい。

(17)(18) (17)は幻滅した自由党の党員に対する倫理的批判の拠り所であり、(18)は政治家に代る「予言者」に設定した文学者たるべき自負の、第一声である。

(19) これについては拙稿「独歩の浪曼主義と『帰去来』の位置」（「立命館文学」1964・7）を参照されたい。

(20) 吉江喬松「国木田独歩研究」（昭7・新潮社版日本文学講座第13巻・明治時代下編に所収）

（独歩の原文引用は、すべて学習研究社版の独歩全集に拠っている。）